

豊後国西国東郡

佐野安東

綴・伝承帖

豊後国西国東郡

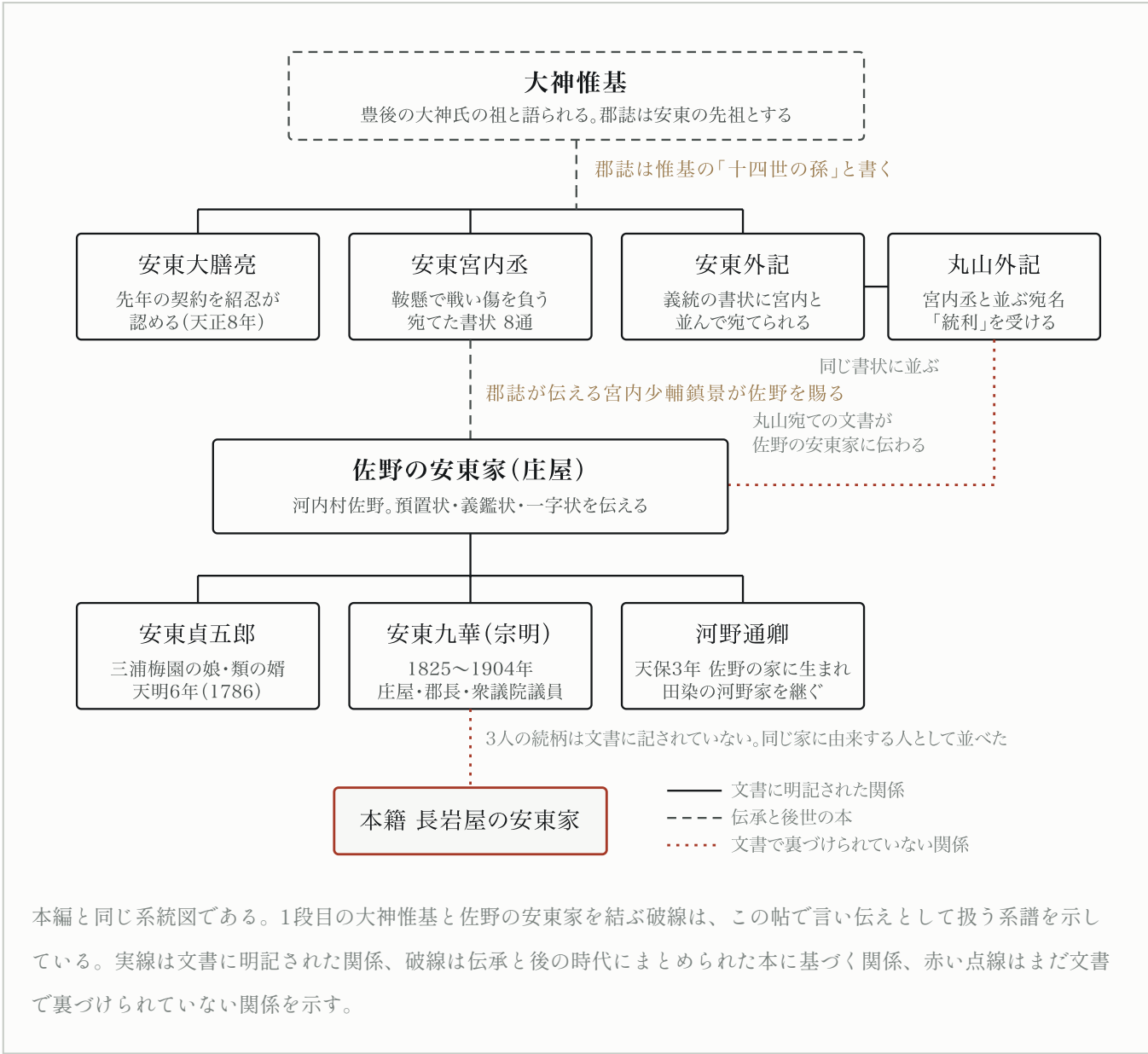
佐野安東 綴・伝承帖

この帖は、豊後国東半島の西にある佐野（いまの豊後高田市佐野）で、代々続いてきた安東家についてまとめたものである。本編『佐野安東家記』で確かめたことに、言い伝えや後世の本に記された話を加え、年代順に並べて一続きの読み物とした。確かめたことは、その時代に書かれ、現存する文書によって裏づけられている。言い伝えの話は、そう語られてきたこと、そう書いた本があることを、出典とともに並べる。それぞれ言い方を変えて書き分け、本文を読むだけで、どこまでが文書にあり、どこからが言い伝えかが分かるようにした。

目次

- | | | | |
|---|-------------------|----|----------------------------|
| 序 | 系統図、地図、年表 | 七 | 安東九華 庄屋から議員へ |
| 一 | 大神惟基 姥岳の大蛇の子 | 終 | この帖の使い方 |
| 二 | 安藤名 図田帳の土地 | 附 | 出典を調べても確認できない話、資料によって異なる年代 |
| 三 | 西畠と丸山 佐野の家に伝わる古文書 | 注 | 推定の理由、系統図と地図の読み方 |
| 四 | 安東宮内丞 鞍懸の一年 | 索引 | 登場する人 |
| 五 | 安東外記と丸山外記 義統からの2通 | | |
| 六 | 安東貞五郎 梅園の婿 | | |

序 系統図、地図、年表





- 同時代の文書によって関係を確認できる ❶ 軍記や後世の本が伝える ❷ 伝承や距離・分布のみに基づく関係
- 家の起こりとして語られる土地 ○ 出来事の地

大分県全体を対象に、安東家の起こりとして語られる土地と、安東家の名が文書に残る土地を示した。輪は佐野からの距離を表す。黒丸は家の起こりとして語られる土地、白抜きは出来事の地を示す。丸の縁の破線は後の時代にまとめられた本、点線は軍記に出る土地を示す。



- 同時代の文書によって関係を確認できる 点線 軍記や後世の本が伝える 点線 伝承や距離・分布のみに基づく関係
- 文書が伝わる家・出来事の地
- ① 来縄（久縄） 寛正2年の預け置き

国東半島の西部を対象に、安東家の人々が活動した土地と、安東家の人々の名前が記された土地を示した。輪は佐野からの距離を表す。丸の縁の実線は、その時代の文書に記された土地を示す。破線は、後の時代にまとめられた本に記された土地を示す。点線は、軍記や地誌に登場する土地を示す。白抜きは、文書が伝わる家と出来事の地を示す。天正8年の鞍懸城は佐野にあったと郡誌が記しているため、佐野の丸と同じ場所に示している。

年	人	できごと	出典
弘安8年ヵ（1285）	安藤名	豊後国岡田帳に「安藤名 六町六段」	編年大友史料 コマ259
寛正2年7月（1461）	西畠道秀入道	久縄のうち田1町2反余・畠5反余を預け置かれる	郡誌 古文書 第三十二
享禄5年8月（1532）	丸山三郎右衛門	大友義鑑が豊前・筑前への出陣を知らせる	同 第三十
天正8年3月（1580）	宮内丞・丸山外記丞	鞍懸の敵と懸け合い、手火矢を放つ	同 第二
天正8年閏3月（1580）	宮内丞・大膳亮	鞍懸の防戦で宮内丞が傷を負う	同 第三・第五十六
天正8年7月（1580）	宮内丞・帯刀亮・丸山外記亮	親家が塩硝10斤と玉150を送る	同 第五十九
天正8年9月（1580）	宮内丞	鞍懸へ加勢に出た豊前の悪徒を追いつ崩す	同 第四

年	人	できごと	出典
天正8年10月（1580） 推定（注2）	宮内亮	鞍懸の城を固めた忠節を親家が聞き及ぶ	同 第五十八
天正8年（1580）	宮内少輔鎮景・統貞	鞍懸城の親貫を攻めた功により佐野を賜り、食邑とした	郡誌 人物 第九
天正8年（1580）以後 推定（注1）	宮内丞	紹忍が郷の100貫から人夫を急いで出せと命じる	同 第五十七
天正15年正月（1587）	丸山外記	義統が「統利」の名を与える	同 第二十四
天明6年5月（1786）	三浦梅園・安東貞五郎	梅園が杵築侯に召された次第を婿に書き送る	梅園全集 下
文政8年3月（1825）	安東九華	佐野の家に生まれ、のちに庄屋を継ぐ	郡誌 人物 第九
明治15年9月（1882）	安東九華	西国東郡長に任じられる	郡誌 官公署
明治23年（1890）	安東九華	第1回の衆議院議員に選ばれる	郡誌 人物 第九
明治32年5月（1899）	安東九華	郷の人びとが邸の東に寿蔵碑を建てる	郡誌 人物 第九
明治37年1月（1904）	安東九華	自宅で没する（享年79）	郡誌 人物 第九

年の順に並べた。年は本文と同じく和暦（西暦）で書く。「カ」は、出典である『編年大友史料』の編者が年を推定したものを示す。「推定」は当方の判断であり、その理由は注に記した。同時代の文書にあるできごとと、後の世の本が伝えるできごとを、同じ表に並べている。どちらであるかは、本文の言い方で分かる。大神氏の祖の話は年を持たないので、表に入れず一章に置いた。

この帖の読み方

話の確かさは、よりどころとした資料によって異なる。本文では、記述の確かさに応じて表現を使い分けている。「～である」「～と書く」と記した箇所は、その時代に書かれた現存文書に基づく記述である。「～と伝える」は、後の時代にまとめられた本に基づく記述である。「～と語られる」は、軍記や近世の地誌、口碑に基づく記述である。「～と考えられる」は、理由を添えた筆者の推測である。

各章の終わりにある「この章の原文と出典」では、出典の冒頭に資料の種類を記している。附には、よく語られているものの、出典を調べても確認できなかった話と、資料によって異なる年代を集めた。いま確かなのは、そのように語られ、そのように書かれてきたという事実である。同時代の記録が一点でも見つければ、その記録をよりどころとして書き改める。

一 大神惟基 姥岳の大蛇の子

寿永2年（1183）の緒方惟栄より5代前の話として語られる

この章で分かること

- 郡誌は、佐野の安東家の先祖を大神惟基と記している
- 平家物語は、大神氏の始まりを、姥岳の大蛇が娘のもとに通って生まれた子だと語る
- その子から5代後の末裔が、源平の争いで名を上げた緒方三郎惟栄である

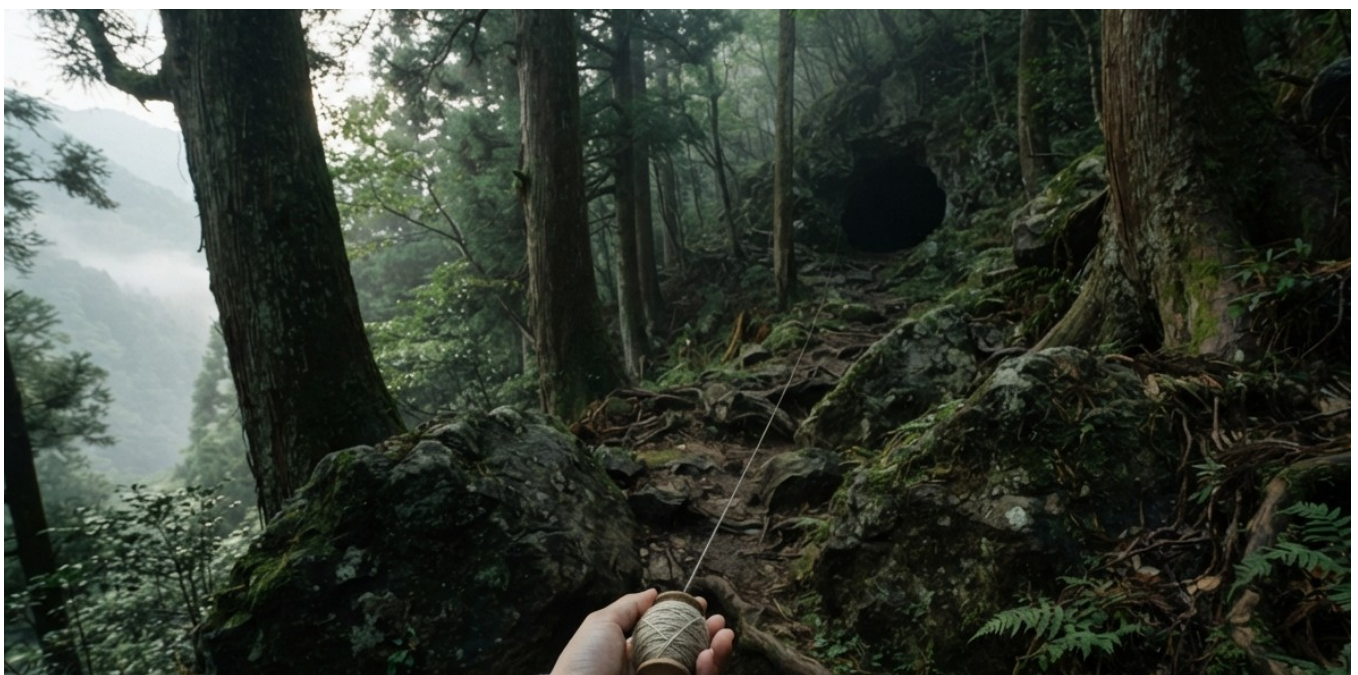
郡誌が記す先祖

『西国東郡誌』の人物の章は、安東九華の家について「其先大神惟基より出で、世々大友氏に事ふ」と書き出す。大神惟基は、豊後の大野・直入の一带に広がった大神氏の祖と伝える人である。佐野の安東家の話は、この一行から始まる。

姥岳の大蛇

その大神氏の始まりを、『平家物語』巻八「緒環（おだまき）」が語っている。豊後の山里に住む娘のもとへ、名も告げない男が夜ごと通ってきた。娘の母に言われて、娘は帰っていく男の衣の襟に、糸を通した針を刺した。糸をたどっていくと、日向との境にある姥岳の岩屋へ続いていた。岩屋の奥にいたのは、喉に針を受けた大蛇であった、と語られる。

やがて娘は男の子を生んだ。この子の5代の末が緒方三郎惟栄であると、平家物語は語る。惟栄は、源平の争いのとき豊後で平家に背き、大宰府から平家を追い落とした人と語られる。



生成画像 糸をたどって姥岳の岩屋へ

400年をつなぐ一文

惟基の名は、大神氏の系図に現れる。郡誌が安東の先祖を惟基と書くのは、佐野の安東家を大神氏の流れに置く書き方である。安東の人びとの名が文書に現れるのは、四章で扱う天正8年からである。それ以前の約400年を、郡誌のこの一行がつないでいる。

出典 軍記。『平家物語』巻八「緒環」。郡誌の記述は、『西国東郡誌』第二十六章「人物」第九（pid 978679、コマ302）による。

二 安藤名 図田帳の土地

弘安8年（1285）と考えられる

この章で分かること

- 鎌倉時代の豊後国図田帳に「安藤名 六町六段」とある
- 編者は、現在、安藤という村はなく、大野郡に安東村がある、と按文を付けている
- 現在の豊後大野市大野町には字「安藤」があり、安東姓の人がまとまって住んでいる

図田帳の「安藤名」

図田帳は、国ごとに田の広さと持ち主を書き上げた帳面である。豊後国の図田帳は弘安8年（1285）のものが知られており、『編年大友史料』はこれを翻刻し、名（みょう）ごとに編者の按文を付けている。

その中に「安藤名、六町六段」の一行がある。6町6段は、現在の面積に換算すると、およそ6.5ヘクタールにあたる。編者の按文は、「今、安藤村なし、大野郡安東村有、積田の地続也」と書く。帳面の安藤名を、大野郡の安東村に当てた読みである。

大野町の字「安藤」

いまの豊後大野市大野町には字「安藤」があり、そこに安東が約30人住む。帳面の「安藤」と、いまの姓の「安東」は字が違う。同じ土地の名を、時代によって書き分けたものと考えられる。大野郡は大神氏の広がった土地でもあり、一章の話とも重なる。



生成画像 田の広さを帳面に書き上げる



資料 『編年大友史料』に掲載された図田帳のうち、阿南荘から「安藤名、六町六段」までの名の並びと編者の注。画像は国立国会図書館デジタルコレクションより。

佐野からは約48km離れている。安藤名が佐野の安東家の起こりであるかどうかは、いずれの文書にも記されていない。豊後の中に、安東を名乗る土地が鎌倉時代からあった、というところまでが帳面の伝えることである。

出典 後の時代にまとめられた本（編者の比定）。『編年大友史料』（1942）、国立国会図書館デジタルコレクション pid 1043157 コマ259。

「安藤名、六町六段」と「大野郡安」までを画像で確かめた。

三 西畠と丸山 佐野の家に伝わる古文書

寛正2年（1461）から享禄5年（1532）まで

この章で分かること

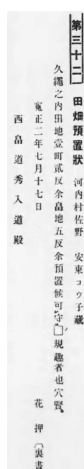
- 佐野の安東家に伝わる最も古い文書は、寛正2年の預け状である
- 享禄5年、大友義鑑は丸山三郎右衛門に豊前・筑前への出陣を知らせる書状を送った
- 2通の宛名は西畠と丸山で、丸山の家から安東家に伝わった文書と考えられる

寛正2年の預け状

寛正2年（1461）7月17日、誰かが花押だけを据えて、一枚の預け状を書いた。宛名は裏に書かれ、「西畠道秀入道殿」とある。久縄の田地1町2反余りと畠地5反余りを預け置き、これまでの定めを守るよう求めた文書である。久縄は、佐野の北西2.6kmにあるいまの来縄（くなわ）と考えられる。字の音と、佐野からの近さによる。〔原文①〕

義鑑の出陣を知らせる触れ

享禄5年（1532）8月21日、大友義鑑は丸山三郎右衛門に一通を送った。近いうちに豊前・筑前へ兵を出すとし付け、その使いの者と申し合わせ、とりわけ忠義に励むなら、後日必ず一つ一つ褒美を加える、と書いている。義鑑は、大友家の20代当主である。丸山三郎右衛門は、その出陣に加わる側の一人として触れを受けている。〔原文②〕



資料 『西国東郡誌』の古文書の章に掲載された、寛正2年の預け状（第三十二）。画像は国立国会図書館デジタルコレクションより。



生成画像 預け状を受け取る道秀入道

丸山家宛ての文書

この2通を伝えたのは、郡誌が刊行された大正12年（1923）の佐野の安東家である。同じ家に伝わる天正15年の一字状（五章）も、宛名は丸山外記である。丸山家は、天正8年の鞍懸の戦いで安東宮内丞とともに戦った家である（四章）。

丸山家の文書が、婚姻か養子縁組によって佐野の安東家に伝わったと考えられる。理由は二つある。一つは、宛名の家が安東家と同じ戦いに加わっていることである。もう一つは、一字状のように家の由緒を示す文書は、婚姻や養子によって家が一つになる際に移ると考えられることである。西畠道秀入道の預け状も、丸山の家がそれより前に受け継いでいたものと考えられる。久縄（来縄）が佐野のすぐ隣だからである。

この章の原文と出典

▼ ① 寛正2年の預け状

久縄之内田地壹町貳反余畠地五反余預置候可守□規趣者也穴賢

寛正二年七月十七日 花押

〔裏書〕西畠道秀入道殿

出典 その時代の文書。河内村佐野 安東コウ子氏蔵。『西国東郡誌』第二十九章 古文書 第三十二、703頁（国立国会図書館デジタルコレクション pid 978679 コマ416）。

▼ ② 義鑑の出陣を知らせる触れ

近々豊筑發向之儀申附候其つかひの峯寄々之者共申合別而忠儀をはけますに於ては後日にならず一々加褒之殿
竈門右馬助に可申候依如件

享祿五年八月廿一日

丸山三郎右衛門とのへ

出典 その時代の文書。河内佐野 安東コウ子氏蔵。『西国東郡誌』第二十九章 古文書 第三十、702～703頁（pid 978679 コマ416）。

「峯」「之殿」は翻刻のままとした。義鑑を大友家の「二十代」とするのは、同書 第四章「高田氏」（コマ75）である。意味を判読できない箇所には言葉を補わず、「使いの者と申し合わせる」という筋だけを取り上げた。

四 安東宮内丞 鞍懸の一年

天正8年（1580）3月から10月まで

この章で分かること

- 安東宮内丞は大友方として佐野の鞍懸城を攻め、手火矢を用いて戦った。閏3月には傷を負った
- 親家は塩硝と玉を送り、9月には、豊前から来た加勢を追い崩した軍忠を賞した
- 郡誌は、鎮景と弟の統貞が功績によって佐野を賜り、その後も安東家が佐野に住み続けたと伝えている

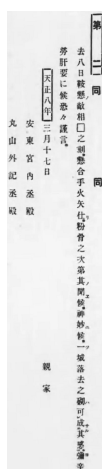
鞍懸城にこもる親貫

天正7年（1579）の末から、国東の田原親貫が大友氏に背き、鞍懸城に立てこもった。郡誌の人物の章では、この城を「佐野鞍懸城」と記している。佐野は、のちに安東家の子孫が代々住んだ土地である。『豊陽志』と『豊後遺事』は、親貫が安岐と鞍掛の二つの城に拠った、と語る。

大友方で鞍懸に向かい合ったのが、安東宮内丞である。その働きを賞した書状が、高田町の二つの家に伝わる。差出の大友親家は宗麟の二男である。郡誌の編者は、親貫が滅びた後に田原の家を継がせるために入れられた人と註を付けている。親家の書状は、3月から10月まで、鞍懸の前で何が起きたかを月ごとに書いている。

3月 手火矢を放つ

3月8日、宮内丞は丸山外記丞とともに鞍懸の敵と戦った。2人は敵に懸け合い、手火矢を放った。手火矢は火縄銃である。9日後の3月17日、親家は2人に宛てて、骨を折ったさまを聞いた、神妙である、と書いた。城が落ちたときに褒美をする、いよいよ苦勞してくれるように、と続けている。〔原文①〕



資料 『西国東郡誌』の古文書の章に掲載された、3月17日付の親家の書状（第二）。画像は国立国会図書館デジタルコレクションより。



生成画像 鞍懸へ向かう鉄炮の衆

3月23日、親家は宮内丞一人に宛てて、もう一通を書いた。宮内丞が、鞍懸の城の中に向けた計策（はかりごと）を知らせてきたのである。寄合中の者たちが、初めから二心なく計策を進め、その経緯を一通の書状にまとめて届けてきたという。親家はそれを、思っていたとおり頼もしい、と書き、御座所へ注進すればきっとお褒めがある、親家としてもひとかど褒美をする、と続けた。城の外で戦うだけでなく、城の中へ働きかける役も、宮内丞が担っていたことが分かる。〔原文②〕

閏3月 傷を負う

閏3月13日、鞍懸の城の前で防ぎ戦いがあり、宮内丞は傷を負った。翌14日、この傷のことで、2通の書状が書かれている。

一通は親家から宮内丞へのものである。傷を負ったという知らせが親家のもとへ届き、親家はそれを見て感じ入った、と書く。このたびの初めからの忠義は忘れない、必ずこの先、心にかける、と結んでいる。

〔原文③〕

もう一通は、田原紹忍から安東大膳亮へのものである。紹忍は大友家の重臣である。紹忍は、先日の鞍懸の矢入で勝ったことをめでたいと書き、宮内丞が傷を負ったことと、その骨折りが比べるものがないものであることを、大膳亮に伝えている。さらに、大膳亮がこちらへ遣わした名代もまた傷を負った、あれもこれも忠義の至りである、必ず一段と褒める、と続けている。同じ日に、同じ戦いのことで、安東の2人に別々の書状が出ている。〔原文④〕

大膳亮と宮内丞の続柄は、いずれの文書にも記されていない。紹忍が宮内丞のことを大膳亮に知らせていることから、大膳亮は宮内丞の親族か、家中で上位に立つ人物と考えられる。



生成画像 傷の知らせに筆を執る親家

7月 塩硝10斤と玉150

鞍懸の城は、春を過ぎて落ちなかった。7月2日、親家は宮内丞・是安帯刀亮・丸山外記亮の3人に宛てて書いた。たびたび鞍懸の悪党と懸け合い、軍の労を励んでいると聞いた。まことに神妙の至りである。静まったときには、どのようにでも褒める、と書いている。そのうえで、塩硝（火薬）10斤と玉150を送る、なお詫摩佐渡入道が申し伝える、と結んでいる。〔原文⑤〕

10斤は、およそ6キログラムにあたる。3月に手火矢を放った2人（宮内丞と丸山外記）が、ここでも並んで宛てられている。鉄炮の衆に、大友の側から火薬と玉が届いていたことが、この一通で分かる。

9月 豊前からの加勢

9月6日、豊前の方から鞍懸へ加勢に出てきた者たちがいた。宮内丞はすぐに敵と懸け合い、とりわけ力を尽くして、時を移さず追い崩した。翌7日、親家は、軍忠は比べるものがない、静まったときにはひとかど褒美をする、と書いた。3月から9月まで、宮内丞は半年のあいだ鞍懸の前に立ち続けたのである。

〔原文⑥〕

10月 鞍懸を固めた忠節

10月21日の一通は、「安東宮内亮殿」に宛てられている。去る春、境目へ敵が乱れ入ったときに寄合の者が筋道を立てて奔走したこと、また、とりわけ鞍懸を固めていたときに折々の忠を尽くしたことを聞き及んだ。神妙である、と親家は書いている。追って褒美をすることを、詫摩佐渡入道が申し伝える、と結ぶ。

〔原文⑦〕

その後 100貫の郷から人夫を出す

ある年の12月28日、田原紹忍は宮内丞に宛てて書状を送った。先年、大膳亮と取り交わした約束の内容は、年を重ねてもよく心得ている。それに見合うことは疎かにしない、と述べたうえで、本題に入る。その郷の100貫の高のうちから人夫を出してほしい、こちらでいま人が欠けているので、急いで差し出すことが肝要である、という一通である。〔原文⑧〕

宮内丞が治める郷の高は、100貫であったと考えられる。紹忍が「其郷百貫」のうちから人夫を出すよう求めているからである。どこの郷かは書かれていない。安東が大友方の地侍として郷を持ち、人を出す立場にあったことを、この一通が示している。

親貫の最期

親貫がどう果てたかは、後の世の本が語る。『豊陽志』と『豊後遺事』は、親貫は安岐と鞍掛の二つの城に拠ったが、やがて敗れて豊前の時枝へ逃れ、ついに城が破れて自害した、と語り、その日を天正8年2月24日とする。『田原家譜』は、これとは別の書き方をしている。

郡誌の編者は、2月24日の説を採らない。親家が9月7日に宮内丞へ送った書状に、豊前から鞍懸へ加勢に出てきた者を追い崩したとあるため、その時点では親貫はまだ死んでいなかったと判断している。書状の

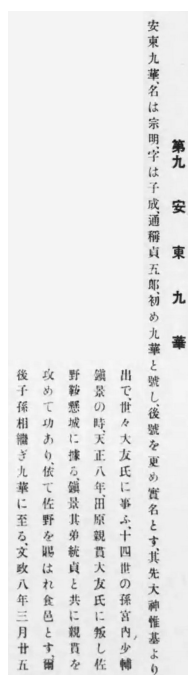
日付が、後の世の本の日付を正した例である。3月の手火矢も、閏3月の傷も、9月の加勢も、親貫がまだ城にいたときのことになる。〔原文⑨〕

佐野を賜る

郡誌の人物の章は、この戦いの後について、次のように伝える。惟基から14世の孫にあたる宮内少輔鎮景は、弟の統貞とともに鞍懸城にいた親貫を攻めて功を立て、その功績によって佐野を賜り、食邑とした。以後、子孫が佐野に続いて九華に至る。〔原文⑩〕

書状に出てくる名は宮内丞・大膳亮・外記である。一方、郡誌の人物の章に出てくる名は鎮景・統貞である。両者とも宮内の官途を名乗り、天正8年の鞍懸で戦っている。書状の宮内丞と鎮景は同じ人物と考えられる。しかし、書状には実名が書かれておらず、宮内少輔と宮内丞では官途も一段違う。ここでは決めない。

書状から確かめられるのは、天正8年の3月から10月にかけて、安東の家の者が大友方として佐野の鞍懸城を攻め、傷を負いながら戦ったことである。その後も、宮内丞は郷を治めて人を出す立場にあった。郡誌が伝えるのは、その功で佐野が安東の家の土地になり、家がそこに続いたことである。この二つの記録が重なるところに、佐野の安東家の起こりを見いだせる。



資料 『西国東郡誌』の人物の章に掲載された、安東九華伝の書き出し。鎮景が弟の統貞とともに親貫を攻め、その功績によって佐野を賜り、食邑としたと記されている。画像は国立国会図書館デジタルコレクションより。



本章に収録した8通の書状の写し。天正8年の鞍懸の戦いに際して、親家と紹忍が安東宮内丞らに送った書状を、日付の順に右から並べた。番号は、本章の原文に付した番号と同じである。画像は『西国東郡誌』第二十九章 古文書（国立国会図書館デジタルコレクション）より。

この章の原文と出典

▼ ① 3月 手火矢を放つ

去八日鞍懸敵相□之刻懸合手火矢仕粉骨之次第其間候神妙候一城落去之砌可成其感彌辛勞肝要に候恐々謹言

天正八年三月十七日 親家

安東宮内丞殿 丸山外記丞殿

出典 その時代の文書。高田町の安東家蔵。『西国東郡誌』第二十九章 古文書 第二、680頁（pid 978679 コマ405）。

▼ ② 3月 手火矢を放つ

從鞍懸注計策候寄合中最前以來以無別心首尾一通到來候乍案中頼敷候至御座所刻遂注進候はゞ冬直可被成御感乍勿論於親家一廉可令賞候彌馳走頼入候恐々謹言

天正八三月廿三日 親家

安東宮内丞殿

出典 その時代の文書。高田町の安東家蔵。『西国東郡誌』第二十九章 古文書 第一、679頁（pid 978679 コマ404。画像で確かめた）。

翻刻は「冬直」とする。文意から「定而」（きっと）と解した。

▼ ③ 閏3月 傷を負う

昨日十三鞍懸表防戦之刻被疵候由聞忠狀到來被見感入候今度最前以來之忠義非忘却候間必於向後可加心候恐々謹言

天正八閏三月十四日 親家

安東宮内丞殿

出典 その時代の文書。高田町の安東家蔵。『西国東郡誌』第二十九章 古文書 第三、680頁（pid 978679 コマ405）。

▼ ④ 閏3月 傷を負う

其表動之様預注進候先日鞍懸矢入勝利之趣尤珍重候宮内丞被疵之由粉骨之次第無比類候然者於此方義名代遣候是又被疵彼是忠意之至候必一段可賀候恐々謹言

壬三月十四日 紹忍

安東大膳亮殿

出典 その時代の文書。高田町玉津の家蔵。『西国東郡誌』第二十九章 古文書 第五十六、711頁（pid 978679 コマ420）。年は書かれていない。閏3月の書状であり、鞍懸の矢入れと宮内丞の傷に関する記述が、親家の閏3月14日付の書状と一致するため、天正8年のものと考えられる。

▼ ⑤ 7月 塩硝10斤と玉150

節々鞍懸惡黨等懸合被勵軍勞候趣誠神妙之至候靜謐之刻何様可賀之候仍鹽硝十斤玉百五十遣之候猶詫摩佐渡入道可申候恐々謹言

天正八年七月二日 親家

安東宮内丞殿 是安帶刀亮殿 丸山外記亮殿

出典 その時代の文書。高田町玉津の家蔵。『西国東郡誌』第二十九章 古文書 第五十九、712頁（pid 978679 コマ421）。

▼ ⑥ 9月 豊前からの加勢

昨日六豊前表惡徒共爲鞍懸加勢罷出候之處早々懸合別而被竭粉骨不移時刻被迫崩之趣軍忠無比類候河様靜謐之砌一稜可成其感候恐々謹言

天正八九月七日 親家

安東宮内丞殿

出典 その時代の文書。高田町の安東家蔵。『西国東郡誌』第二十九章 古文書 第四、680頁（pid 978679 コマ405）。「河様」「一稜」は翻刻のままで、「何様」「一廉」の意に取った。

▼ ⑦ 10月 鞍懸を固めた忠節

去春堺目亂入之砌寄合之者以順路之覺悟致馳走候段鱗□依申憶存知候殊鞍懸堅固之刻折々懇忠之次第聞及神妙候追而可成其感之趣詫摩佐渡入道可申候恐々謹言

十月廿一日 親家

安東宮内亮殿

出典 その時代の文書。高田町玉津の家蔵。『西国東郡誌』第二十九章 古文書 第五十八、712頁（pid 978679 コマ421）。年は書かれていない（注2）。宛名は翻刻では「宮内亮」となっており、ほかの書状の「宮内丞」と一字異なる。ただし、「去春」の鞍懸に関する記述と、詫摩佐渡入道が申し伝える書式が、7月2日付の書状と一致するため、同一人物と考えられる。

▼ ⑧ その後 100貫の郷から人夫を出す

先年大膳亮契約之績重疊年趣得其心候相應之儀共不可有疎意候仍其郷百貫内人夫之事爰許當時被闕御事候條急速被差出專要之儀候猶兩人可申候恐々謹言

十二月廿八日 紹忍

安東宮内丞殿

出典 その時代の文書。高田町玉津の家蔵。『西国東郡誌』第二十九章 古文書 第五十七、711～712頁（pid 978679 コマ420～421）。年は書かれていない（注1）。

▼ ⑨ 親貫の最期

豊陽志豊後遺事等に、親貫は天正八年二月廿四日、安岐鞍掛兩城に據る、既にして敗れ、豊前時枝に出奔し、遂に城破れ自殺すとあるも、田原家譜に據れば〔中略〕兎に角親貫の死したるは二月二十四日に非ずして其れより後の事なるべし〔中略〕九月七日安東宮内丞に送りたる書状に察するも、此時親貫尚ほ死し居らざるが如し。

出典 後の時代にまとめられた本。『西国東郡誌』第二十九章 古文書 第一の編者註（679～680頁、pid 978679 コマ404～405。画像で確かめた）。

▼ ⑩ 佐野を賜る

十四世の孫宮内少輔鎮景の時、天正八年、田原親貫大友氏に叛し佐野鞍懸城に據る、鎮景其弟統貞と共に親貫を攻めて功あり、依て佐野を賜はれ食邑とす、爾後子孫相繼ぎ九華に至る

出典 後の時代にまとめられた本。『西国東郡誌』第二十六章 人物 第九（pid 978679 コマ302）。

五 安東外記と丸山外記 義統からの2通

年が記されていない文書が一通と、天正15年（1587）の文書が一通ある

この章で分かること

- 大友義統は、安東宮内と安東外記の2人に、堀木・丸山一族と申し合わせるよう書き送った
- 天正15年、義統は丸山外記に「統利」の名を与えた
- その一字状は、高田町ではなく佐野の安東家に伝わる

安東宮内と安東外記

大友義統は宗麟の子で、このとき大友家の当主である。5月4日、義統は「安東宮内とのへ」「安東外記とのへ」の2人に宛てて、仮名まじりの書状を送った。このたびそちらで戦ったとき、波多藤次兵衛尉の指図を受けて、とりわけ奔走したことに感じ入った、と書いている。さらに、堀木・丸山の一類の衆と申し合わせ、油断なく心がけることが第一である、と続けている。〔原文①〕

安東外記は、この一通にしか名が出ない。宮内と並べて宛てられているので、同じ安東の家の一人と考えられる。丸山外記とは姓が異なる、別の人物である。義統はこの書状で、安東の2人に、堀木・丸山の一類の衆と申し合わせるよう求めている。そのため、安東と丸山は一つの衆として大友家に仕えていたと考えられる。



生成画像 義統の書状を届ける使い

「統利」の一字状

天正15年（1587）正月7日、義統は丸山外記に一字状を与えた。本文は一行で、「統利」の名を遣わす、とだけ書く。「統」は義統の名の一字である。主君が家臣に自分の名の一字を与えるのは、目をかけた者への礼である。〔原文②〕

この一字状は、高田町の安東家ではなく、佐野の安東家に伝わる。受けたのは丸山外記であり、天正8年の書状で安東宮内丞と並んで宛てられた丸山外記が、7年後に義統から名をもらったことになる。三章に書いたとおり、丸山の家の文書は婚姻か養子によって佐野の安東家に入ったと考えられる。

この章の原文と出典

▼ ① 安東宮内と安東外記

今度其表□□之刻波多藤次兵衛尉得指南別而馳走のよし感入候彌堀木丸山一類之衆申合無油斷心かけ専一候猶統秀申へくかしく

五月四日 よし統

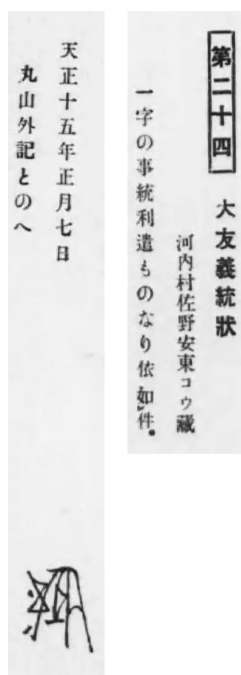
安東宮内とのへ 安東外記とのへ

出典 その時代の文書。高田町の安東家蔵。『西国東郡誌』第二十九章 古文書 第五、680頁（pid 978679 コマ405）。年は書かれていない。

▼ ② 「統利」の一字状

一字の事統利遣ものなり依如件

天正十五年正月七日



資料 『西国東郡誌』の古文書の章に掲載された、義統の一字状（第二十四）と花押。日付と宛名は、同じ頁の別の列に掲載されている。画像は国立国会図書館デジタルコレクションより。

丸山外記とのへ

出典 その時代の文書。河内村佐野 安東コウ氏蔵。『西国東郡誌』第二十九章 古文書 第二十四、700頁（pid 978679 コマ415。義統の花押の写真が添えてある）。

六 安東貞五郎 梅園の婿

天明6年（1786）

この章で分かること

- 国東の学者・三浦梅園の長女、類の夫は安東貞五郎である
- 梅園は杵築侯に召された次第を、婿に長い手紙で書き送った
- 梅園を召した侯が家老に「江戸の先生より上だ」と語ったと、全集の編纂者は伝えている

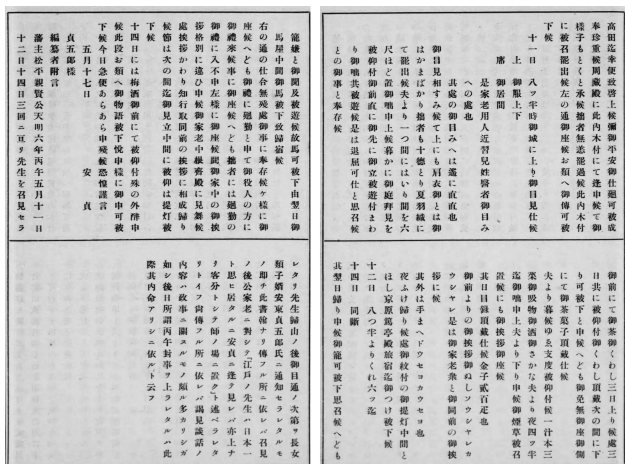
梅園の手紙

天明6年（1786）5月、杵築藩主の松平親賢は、国東の富永村に住む学者、三浦梅園を3度召し出した。11日・12日・14日である。梅園は村に帰ったあと、17日付で婿の安東貞五郎に手紙を書いた。

手紙は、城で受けたもてなしを一つずつ書いている。駕籠が嫌いだと聞いた殿が、馬を下されたこと。家老の中根斎を見舞うと、知行取と同じ扱いの挨拶を受けたこと。帰りには次の間まで見送られ、中間に提灯を持たせてくれたこと。14日には殿の前で梅酒を賜り、ことのほか酔ったこと。そして最後に、このことを類に話して喜ばせてやってほしい、と書く。〔原文①〕

侯の言葉

『梅園全集』の編纂者は、この手紙に附言を付けて、伝えられる話を二つ書いている。一つは、召し出しの後、侯が家老に向かって、「江戸の先生は日本一と思っていたが、安貞に会ってみれば、なお上である。客分として師の座に置く」と述べたという話である。もう一つは、侯と梅園の話は政事にかかわることが多く、梅園がのちに差し出した意見書（丙午封事）は、このとき内々に命じられたものだという話である。



資料 『梅園全集』下巻に掲載された、梅園から貞五郎に宛てた手紙の全文と編纂者の附言。画像は国立国会図書館デジタルコレクションより。



生成画像 杵築の城で侯にまみえる梅園

梅園は、自分がどのようにもてなされたかを、嫁いだ娘の類にも聞かせてほしいと婿に書いた。侯の言葉のほうは、手紙には記されていない。附言が「伝フル所ニ依レバ」と断って書くとおりの、伝えである。

〔原文②〕

「豊後安東氏」に嫁いだ姉

同じ『梅園全集』に、中津藩の医者、征矢野元甫の碑銘がある。梅園の撰である。元甫の父 宗政には2人の娘がおり、姉は「豊後安東氏」に嫁ぎ、妹は藩士の跡部長能に嫁いだ、と書く。豊後のどこの安東かは書かれていない。

出典 その時代の碑銘（刊本による）。『梅園全集』下巻「征矢野元甫翁碑銘」、pid 949195 コマ403（画像で確かめた）。

貞五郎の家

梅園の家と佐野の安東家は、どちらも国東半島にあり、富永から佐野までは20kmほどである。婿に入った貞五郎が、佐野の安東家の人物であることは、手紙にも附言にも書かれていない。ただし、七章の九華も通称を「貞五郎」といい、佐野の家でこの名が受け継がれていたことから、天明6年の貞五郎も佐野の安東家の人物と考えられる。

この章の原文と出典

▼ ① 梅園の手紙

〔前略〕籠嫌と御間及被遊候故馬可被下由翌日御馬屋中間御馬被下致歸宿候〔中略〕御家老中根齊殿に見舞候處
挨拶かわり知行取同前の挨拶に相成歸り候節は次の間迄御見立中間に被仰は提灯被下候十四日には梅酒御前にて
被仰付殊の外酔申候此段お類へ御物語被下悦申様に御申可被下候今日急便あらあら申殘候恐惶謹言

五月十七日 安貞

貞五郎様

出典 その時代の書状（刊本による）。『梅園全集』下巻（1912）、国立国会図書館デジタルコレクション pid 949195 コマ422。宛名と、長女類子の婿安東貞五郎とする編纂者の附言は画像で確かめた。安貞は梅園の字である。

▼ ② 侯の言葉

藩主松平親賢公天明六年丙午五月十一日十二日十四日三回ニ亘リ先生ヲ召見セラレタリ先生歸山ノ後御目通ノ次第ヲ長女類子婿安東貞五郎氏ニ通知セラレタルモノ即チ此書翰ナリ傳フル所ニ依レバ召見ノ後公家老ニ對シテ

「江戸ノ先生ハ日本一ト思ヒ居タルニ安貞ニ逢テ見レバ亦上ナリ客分トシテ師ノ場ニ置ク」ト述べラレタリトイフ

出典 後の時代にまとめられた本。『梅園全集』下巻（1912）編纂者附言、pid 949195 コマ422。

七 安東九華 庄屋から議員へ

文政8年（1825）から明治37年（1904）まで

この章で分かること

- 九華は佐野の家に生まれ、父の死で学問をやめて庄屋を継いだと郡誌は伝える
- 明治8年（1875）に戸長となり、その後、郡長を経て、第1回の衆議院議員に選ばれた
- 74歳のときに、郷の人びとが邸の東に寿蔵碑を建てた

庄屋を継ぐ

ここからは、大正12年（1923）の『西国東郡誌』人物の章が伝えることである。九華の没後19年に編まれた。

安東九華は名を宗明、字を子成、通称を貞五郎という。はじめは九華と号し、のちにこれを実名とした。文政8年（1825）3月25日、佐野の家に生まれた。幼いころは野本白巖に句読を習い、15歳で帆足万里に師事して漢学を修めた。20歳のころ父を亡くしたため、学問をやめて家に帰り、庄屋の職を継いだと郡誌は伝える。なお、郡誌では庄屋を「里正」と記している。

戸長から議員へ

明治8年（1875）、第1大区2小区の戸長となり、ついで区長となった。三潞・福岡・大分の3県に奉職し、明治15年（1882）9月に西国東郡長に任じられた。郡役所の歴代郡長の表にも「安東九華」の名があり、原籍は西国東郡河内村と記されている。



生成画像 佐野の庄屋の家

明治23年（1890）、国会が開かれるにあたって衆議院議員に選ばれた。最初の議会在解散したあとも再び当選し、全院委員長に挙げられたと郡誌は伝える。晩年は家に居て、時の政事には出ようとしなかったと郡誌は書く。

寿蔵碑

寿蔵碑は、本人が生きているうちに建てる碑である。明治32年（1899）5月、九華が74歳を迎えたとき、郷の人びとが相談し、その功績を後の世に伝えるために、邸宅の東の方に一基の寿蔵碑を建てたと郡誌は伝える。郡誌の同じ頁には、「安東九華翁寿碑」の写真が載る。碑が建った5年後、明治37年（1904）1月8日、九華は家で没した。享年79である。〔原文①〕

佐野の家に生まれた人びと

同じ章の第七に河野通卿がいる。天保3年（1832）に河内村佐野の安東家に生まれ、田染村の河野通達の養嗣子となって河野氏を継いだ。大庄屋を務め、維新のあとは田染村の戸長として自宅を役場にあて、村に初めて学校を開いたと郡誌は伝える。九華と同じく帆足万里の門に学んでいる。明治32年（1899）に没した。享年68である。

産業の章には、文久元年から4年（1861～64）にかけて、河内村の安東貞斎が座繰り製糸を試みた。また、明治7年か8年（1874年か1875年）ごろには、河内村の安東潜が座繰り製糸を始め、明治13年（1880年）には器械6窓を据えたと記されている。郡の製糸の始まりに、河内村の安東の名が二つ並ぶ。

出典 後の時代にまとめられた本。『西国東郡誌』第二十六章 人物 第七（コマ301）、第二十章 本郡生産業（コマ236）。



碑 壽 翁 華 九 東 安

資料 『西国東郡誌』の人物の章に掲載された、「安東九華翁寿碑」の写真。画像は国立国会図書館デジタルコレクションより。

300年後

天正8年に鞍懸の前で戦った安東の家は、300年後、佐野の庄屋の家として維新を迎え、郡長と議員を出した。その間の代々の名は、郡誌の「爾後子孫相継ぎ九華に至る」の一行に畳まれている。一人ずつの名は、菩提寺の過去帳や位牌を調べることで明らかになる。

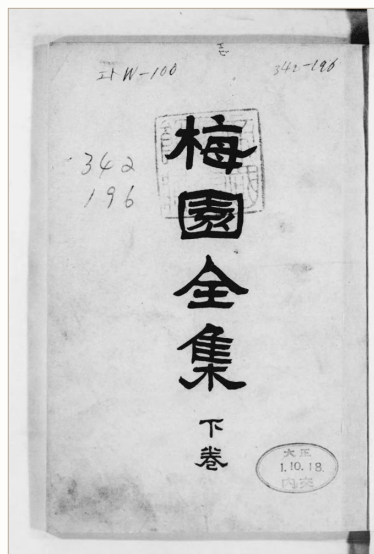
この章の原文と出典

▼ ① 寿蔵碑

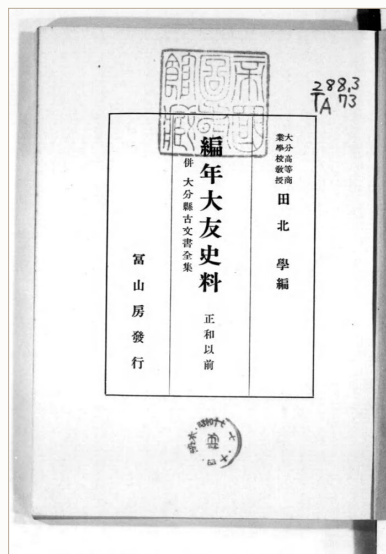
安東九華、名は宗明、字は子成、通稱貞五郎、初め九華と號し、後號を更め實名とす、其先大神惟基より出で、世々大友氏に事ふ、十四世の孫宮内少輔鎮景の時、天正八年、田原親貫大友氏に叛し佐野鞍懸城に據る、鎮景其弟統貞と共に親貫を攻めて功あり、依て佐野を賜はれ食邑とす、爾後子孫相継ぎ九華に至る、文政八年三月廿五日、九華佐野の家に生る〔後略〕

出典 後の時代にまとめられた本。『西国東郡誌』第二十六章 人物 第九、484～486頁（pid 978679 コマ302～303。コマ302は画像で確かめた）。郡長の表は第十三章 官公署（コマ123）。

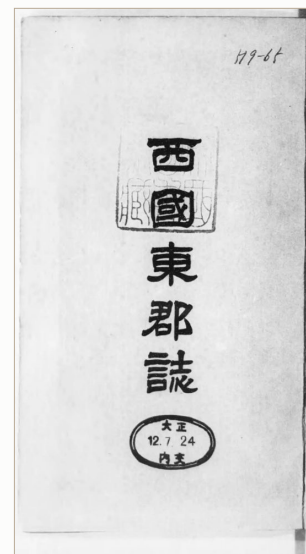
終 この帖の使い方



梅園全集 下巻
六章



編年大友史料
二章



西国東郡誌
二章～七章

この帖で主に用いた本の表紙と扉。いずれも大正から昭和初期に刊行された本で、国立国会図書館デジタルコレクションで全文を閲覧できる。書名の下には、各書から引用した章を示した。画像は国立国会図書館デジタルコレクションより。

家系の由来を調べるには

本籍地である長岩屋（いまの豊後高田市長岩屋）から佐野までは、約9kmである。江戸時代にも十分に行き来できたと考えられる距離であり、長岩屋の安東家がこの系譜につながる可能性もある。家系の由来をこの帖の記述と結びつけるには、次の三つの資料が手がかりになる。

- **菩提寺の過去帳と位牌** 長岩屋の安東家の当主を、江戸時代まで遡って確認できる。確認した当主の名を、佐野の庄屋の家の系譜（郡誌が九華の家として伝えるもの）と照合する。
- **『大分県史料』** 高田町の安東家、玉津の家、佐野の安東家の文書の原本と、そのほかの安東宛ての文書の有無を確認できる。
- **『豊後高田市史』** 鞍懸城、佐野の庄屋の家、九華の寿蔵碑に関する記事を調べることができる。

大神氏の系図の刊本に安東の名が記載されているかどうか、併せて確認する。また、本家と分家の関係、屋号、墓の場所、家紋、代々の名など、家系に伝わる話をお聞かせいただければ、出典を明記したうえで、この帖の章に加えることができる。

完

附 出典を調べても確認できない話、資料によって異なる年代

よく語られているものの、出典を調べても確認できなかった話と、資料によって異なる年代を、話題ごとに挙げる。前者は「語られる話」と「確かめたこと」に、後者は「資料による違い」と「見方」に分けて記す。

義統からの「統」の一字

語られる話 佐野の安東家が、大友義統から「統」の一字を受けた。根拠とされているのは、郡誌の古文書の章に載る、佐野の安東家伝来の一字状である。

確かめたこと

- 一字状の文面は「一字の事、統利遣すものなり」であり、宛名は「丸山外記とのへ」である。「統」の一字を受けたのは丸山外記である（五章）。
 - 佐野の安東家に伝わる中世の文書3通は、宛名がいずれも西畠と丸山である（三章）。
 - 郡誌の人物の章が伝える弟の名は「統貞」であり、「統」の字が入る。ただし、その名を与えた文書は、郡誌の古文書の章には載っていない。
-

親貫の最期の日

資料による違い

- 『豊陽志』と『豊後遺事』は、親貫が天正8年（1580）2月24日に城が落ち、自害したと記す。郡誌の編者註が引く記述である（四章）。
- 郡誌の編者は、親家が9月7日に宮内丞へ送った書状を根拠に、9月7日の時点では親貫はまだ生きていたと判断し、その最期を2月24日より後としている（四章）。

見方 本文では郡誌の編者の判断に従い、3月から9月までの親家の書状を、親貫が鞍懸城にいた時期のものとして読んだ。

注 推定の理由、系統図と地図の読み方

- 注1 天正8年以後。紹忍の12月28日付の書状には、年が記されていない。宮内丞は郷の100貫を治め、人夫を出す立場にあった。また、紹忍が先年の大膳亮との約束に言及しているため、この書状は鞍懸の戦いのあとと考えられる。
- 注2 天正8年10月。親家の10月21日の書状は年を書かない。「去春」の境目の乱入と鞍懸の包囲が天正8年の春からのことなので、この年と見る。
- 系統図の読み方。2段目の3人と丸山外記について、文書から分かるのは、書状の宛名に並んでいることだけであり、続柄は記されていない。1段目の大神惟基と佐野の安東家を結ぶ破線は、郡誌の人物の章に基づく関係を示している。
- 地図上の点の位置は、国土地理院が示す位置による。鞍懸城は、郡誌が「佐野鞍懸城」と記しているため、地図上では佐野の印と同じ場所に示している。
- 平家物語の話は、筋だけを書いた。原文は引いていない。
- 中世文書の文字は、『西国東郡誌』（1923）の翻刻による。翻刻の□は、郡誌が字を示していない箇所である。
- 絵は生成画像である。もとの資料にあるのは、絵の前に置かれた物語・帳面・書状に書かれている内容だけである。山道や部屋のしつらえ、人の姿や装束は、作画に際して想像で補ったものである。
- 図田帳の年は『編年大友史料』の配列による。

索引 登場する人

名前	何をした人か	登場する章
大神惟基	大神惟基は、豊後の大神氏の祖と伝えられている。郡誌は、大神惟基を安東家の先祖としている	一
緒方三郎惟栄	大神氏の祖から数えて5代目の子孫と語られている	一
西畠道秀入道	久縄の田と畠を預け置かれる	三
丸山三郎右衛門	義鑑から出陣の触れを受ける	三
大友義鑑	大友家の当主。豊前・筑前へ兵を出す	三
田原親貫	鞍懸城にこもって大友氏に背く	四
大友親家	宗麟の二男。鞍懸の感状を出す	四
田原紹忍	大友家の重臣。大膳亮と宮内丞に宛てて書く	四
安東大膳亮	名代を鞍懸へ出す。先年の契約	四
安東宮内丞（宮内亮）	鞍懸で戦い傷を負う。郷の100貫	四・五
丸山外記（外記丞・外記亮）	宮内丞と並んで戦い、「統利」を受ける	三・四・五・附
是安帯刀亮	塩硝と玉を受ける	四
詫摩佐渡入道	親家の言葉を申し伝える	四
安東鎮景（宮内少輔）	佐野を賜ったと郡誌が伝える	四
安東統貞	鎮景の弟と郡誌が伝える	四・附
大友義統	大友家の当主。安東外記と丸山外記に書く	五
安東外記	宮内と並んで義統の書状を受ける	五
三浦梅園	国東の学者。婿の貞五郎に書く	六
松平親賢	杵築藩主。梅園を召し出す	六
安東貞五郎	梅園の長女、類の婿	六・七
征矢野元甫	中津藩の医者。姉が豊後安東氏へ	六
安東九華（宗明）	庄屋・郡長・衆議院議員。寿蔵碑	七
河野通卿	佐野の安東家に生まれ、河野家を継ぐ	七
安東貞斎・安東潜	河内村で製糸を始める	七

佐野安東 綴・伝承帖

本編『佐野安東家記』の別巻である。文書で確かめたことに、軍記や近世・近代にまとめられた本が伝える話を加え、年代順につないで読み物にした。原文は表記のままに引き、地の文に組み込み、読みやすくした。国立国会図書館デジタルコレクションの画像で字を確かめたものには頁（コマ）を記した。「資料」の札を付けた7枚と、四章と終章の図には、同コレクションのパブリックドメイン画像を用いた。この一冊は見本であり、本籍地にある家は架空のものである。絵のうち、一〜三章の3枚はこの帖のために描いた。四〜七章の5枚は、見本として別の読み物から借用したものであり、国東の土地を描いたものではない。

